

図書だより

最上校図書委員会
No.19 2月10日



2月図書館企画 バレンタイン特集

「チョコレートと作家」

素晴らしい言葉を生み出すあの作家は、
チョコレートとどんなふうに付き合っているのでしょうか。



《 酒井順子 》 有楽製菓「ブラックサンダー」

私が最も好んでいるのは、コンビニの最下段の棚に並び、いつも下から視線を我々に投げかける憎い奴、ブラックサンダー。



「ユーミンの罪」 酒井順子著

ユーミンの歌とは女の業の肯定である——ユーミンとともに駆け抜けた1973年からバブル期の時代と女性達を辿る、初の新書。ユーミンが私達に遺した「甘い傷痕」とは？ キラキラと輝いたあの時代、世の中に与えた影響を検証する。



《 穂村弘 》 ハーシー「ミニチュアーズ」

小学生の頃、米軍基地関連の住居エリアでハロウィンという行事が行われていた。魔法のようなお化けたちの夜。持って行った大きな袋に見たことのないパッケージのお菓子がいっぱい。私は夢見心地のまま、家に帰った。いちばん大切なのはカラフルなチョコレートだった。その名をハーシーと教えられた。

「ラインマーカーズ」 穂村弘著

青春の歌、恋愛の歌、都市の歌、祈りの歌。世界的アーティスト、大竹伸朗が描き下ろしたチャーミングな装丁にくるまれた、これはあなたと世界の心臓を爆破するキュートで危険な歌集です。



《 角田光代 》 デメル「ソリッドチョコ猫ラベル」

デメルは自分で買うためのチョコレートではない。プレゼントしたり、されたりする種類のチョコレートだ。わくわくさせたり、したりするためのチョコレートだ。



「紙の月」 角田光代著

わかば銀行から契約社員・梅澤梨花(41歳)が1億円を横領した。梨花は発覚する前に、海外へ逃亡する。彼女は、果たして逃げ切れるのか？ あまりにもスリリングで狂おしいまでに切実な小説。

「月と雷」 角田光代朝

子どもの頃に母が家出したため、普通の家庭を知らぬまま大人になった泰子。レジ打ちの仕事しながら、家と職場を往復する毎日を送っていた。婚約者もでき、亡くなった父が残してくれた持ち家で暮らす日々は、大きな喜びこそないが小さな不幸もない。



《 米澤穂信 》 THEO&PHILO「ARTISAN CHOCOLATES」

チョコレート・セレクトショップの中でも、私はフィリピンのテオアンドフィロの板チョコがとりわけ好きになった。ひとかけ口にすれば野性味と洗練が調和して、私はまことにしあわせだった。チョコレートがなくても人は生きていける。でもチョコレートがあれば、人生は少しだけ素敵になるのだ。



「Iの悲劇」 米澤穂信著

一度死んだ村に、人を呼び戻す。それが「甦り課」の使命だ。山あいの小さな集落、藁石。六年前に滅びたこの場所に人を呼び戻すため、Iターン支援プロジェクトが実施されることになった。業務にあたるのは藁石地区を擁する、南はかま市「甦り課」の三人。彼らが向き合うことになったのは、一癖ある「移住者」たちと、彼らの間で次々と発生する「謎」だった—。



徐々に明らかになる、限界集落の「現実」！そして静かに待ち受ける「衝撃」。



ドキドキ・ワクワク・青春してる！！

「僕が恋をした、一瞬をきらめく君に」 音はつき著

サッカー選手になる夢を奪われ、なにもかもを諦めていた高2の樹。転校先の高校で友達も作らず、ひとりギターを弾くのが心落ち着く時間だった。ある日公園で弾き語りをしているのを同級生の咲果に見つかってしまう。かつて歌手になる夢を見ていた咲果と共に曲を作り始めた樹は、彼女の歌声に可能性を感じ、音楽を通じた将来を真剣に考えるようになる。どん底にいた樹がやっと見つけた新しい夢、だけど咲果には、その夢を追いたくても追えない悲しい秘密があった。

「余命一年と宣告された僕が、余命半年の君と出合った話」 森田碧著

高校一年の冬、早坂秋人は心臓病を患い、余命宣告を受ける。入院している桜井春奈と出会う。自分はまだ恋をしてもいいのだろうか？ 淡々と描かれるふたりの日常に、儂い美しさはかなと優しさを感じる、純愛小説。

「今夜、もし僕が死ななければ」 浅原ナオト著

新山遥には、死の近づいている人がわかる。十歳で交通事故に遭い、両親と妹を失ったころからだ。なぜこんな力が自分にあるのか、なんのためにこの力を使えばいいのかはわからない。けれど見て見ぬふりのできない彼は、死の近い人々に声をかけ寄り添う。二十四歳になった遥は、我が子の誕生を待っていたが？ 涙があふれて止まらない、運命の物語。

「彼女は僕の顔を知らない」 古宮九時著

死者複数名を出した凄惨なキャンプ場放火事件から10年。僕の前に、同じ事件の生存者・静葉が転校生として現れる。事件当日に怪しげな男と遭遇したと言う静葉だが、彼女は“失貌症”、人の顔が認知できない病だった。差出人不明の脅迫状、黒服の男、不審火の記録。10年を経て再び事件は動き出す。僕が静葉へ捧ぐ贖罪の物語。

「奈落の底で君と見た虹」 柴山ナギ著

ネットカフェで深夜働く蓮。そこに場違いな美少女・美憂がやってきた。余命三カ月の父親のためにマンションを処分したという。他に身寄りのない美憂のため父親の過去を辿ることにした二人。すると、美憂の出生や母の秘密が徐々に明らかになり一。ラスト号泣必至の青春小説。



令和二年度

新庄北高最上校 校内多読賞発表

個人賞

順位	学年	出席番号	名前	冊数
1位	1年	19番	本間 智裕	70冊
2位	3年	18番	矢口 瑞基	57冊
3位	2年	8番	吉田 愛海	56冊
4位	3年	12番	高橋 昂	45冊
5位	1年	16番	中川 大夢	43冊
6位	3年	15番	古瀬 泰斗	29冊
7位	1年	4番	伊藤 優翔	25冊
8位	2年	4番	笠原 那月	24冊
9位	1年	11番	菅 綾夏	22冊
10位	2年	3番	井上 瑠菜	15冊
10位	1年	17番	沼澤 龍樹	15冊

クラス賞

順位	学年	冊数	一人平均冊数
1位	2学年	115冊	14.3冊
2位	1学年	267冊	12.7冊
3位	3学年	211冊	10.0冊

生徒貸出冊数 合計 601冊 一人平均 12.0冊

(令和2年5月～令和3年1月29日までの統計です。)

※全学年、3月2日に表彰します。

※来年度も、多数の図書館利用をお待ちしております。

